

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成26年1月1日
(第52期) 至 平成26年12月31日

株式会社建設技術研究所

東京都中央区日本橋浜町三丁目21番1号

(E04903)

第52期（自平成26年1月1日 至平成26年12月31日）

有価証券報告書

- 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

株式会社建設技術研究所

目 次

	頁
第52期 有価証券報告書	
【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
5 【従業員の状況】	6
第2 【事業の状況】	7
1 【業績等の概要】	7
2 【生産、受注及び販売の状況】	8
3 【対処すべき課題】	9
4 【事業等のリスク】	9
5 【経営上の重要な契約等】	9
6 【研究開発活動】	10
7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	10
第3 【設備の状況】	11
1 【設備投資等の概要】	11
2 【主要な設備の状況】	11
3 【設備の新設、除却等の計画】	11
第4 【提出会社の状況】	12
1 【株式等の状況】	12
2 【自己株式の取得等の状況】	15
3 【配当政策】	16
4 【株価の推移】	16
5 【役員の状況】	17
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	20
第5 【経理の状況】	26
1 【連結財務諸表等】	27
2 【財務諸表等】	56
第6 【提出会社の株式事務の概要】	69
第7 【提出会社の参考情報】	70
1 【提出会社の親会社等の情報】	70
2 【その他の参考情報】	70
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	71
監査報告書	
内部統制報告書	
確認書	

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成27年3月27日

【事業年度】 第52期（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

【会社名】 株式会社建設技術研究所

【英訳名】 CTI Engineering Co., Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 村田 和夫

【本店の所在の場所】 東京都中央区日本橋浜町三丁目21番1号

【電話番号】 03(3668)0451(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役執行役員管理本部長 寺井 和弘

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋浜町三丁目21番1号

【電話番号】 03(3668)0451(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役執行役員管理本部長 寺井 和弘

【縦覧に供する場所】 株式会社建設技術研究所 大阪本社
(大阪市中央区道修町一丁目6番7号)

株式会社建設技術研究所 中部支社
(名古屋市中区錦一丁目5番13号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第48期	第49期	第50期	第51期	第52期
決算年月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月	平成25年12月	平成26年12月
売上高 (百万円)	30,939	33,646	32,515	36,435	39,524
経常利益 (百万円)	1,279	1,129	1,076	1,638	2,525
当期純利益 (百万円)	634	421	550	982	1,490
包括利益 (百万円)	—	507	701	1,270	1,584
純資産額 (百万円)	19,658	19,876	20,350	21,392	21,870
総資産額 (百万円)	32,243	30,332	32,319	37,132	41,011
1株当たり純資産額 (円)	1,383.80	1,397.99	1,429.83	1,504.86	1,539.79
1株当たり当期純利益 (円)	44.84	29.83	38.91	69.46	105.38
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	60.7	65.2	62.6	57.3	53.1
自己資本利益率 (%)	3.3	2.1	2.8	4.7	6.9
株価収益率 (倍)	10.12	17.60	15.50	15.22	14.62
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	3,025	△1,005	921	3,012	3,591
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△1,483	683	△167	△962	568
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△696	△238	△476	89	△108
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	6,559	6,163	6,448	8,592	12,659
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (名)	1,452 (535)	1,557 (495)	1,588 (510)	1,633 (492)	1,652 (496)

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益につきましては、潜在株式がないため該当事項はありません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第48期	第49期	第50期	第51期	第52期
決算年月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月	平成25年12月	平成26年12月
売上高 (百万円)	27,220	28,416	27,040	30,059	33,211
経常利益 (百万円)	1,121	946	878	1,619	2,275
当期純利益 (百万円)	541	363	463	969	1,366
資本金 (百万円)	3,025	3,025	3,025	3,025	3,025
発行済株式総数 (株)	14,159,086	14,159,086	14,159,086	14,159,086	14,159,086
純資産額 (百万円)	19,225	19,428	19,792	20,840	22,040
総資産額 (百万円)	29,905	27,373	28,228	32,553	36,282
1株当たり純資産額 (円)	1,359.42	1,373.83	1,399.57	1,473.74	1,558.60
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額) (円)	16.00 (—)	16.00 (—)	16.00 (—)	18.00 (—)	18.00 (—)
1株当たり当期純利益 (円)	38.27	25.68	32.81	68.59	96.66
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	64.3	71.0	70.1	64.0	60.7
自己資本利益率 (%)	2.8	1.9	2.4	4.7	6.4
株価収益率 (倍)	11.86	20.45	18.38	15.41	15.94
配当性向 (%)	41.8	62.3	48.8	26.2	18.6
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (名)	1,255 (504)	1,269 (466)	1,270 (475)	1,295 (441)	1,315 (443)

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益につきましては、潜在株式がないため該当事項はありません。

3 平成25年12月期の1株当たり配当額18円には、株式会社設立50周年記念配当2円を含んでおります。

2 【沿革】

年月	事項
昭和38年4月	建設コンサルタント業を営むことを目的に東京都中央区銀座西(現 銀座三丁目)に建設技研株式会社を設立
〃	設立と同時に本社および大阪市南区(現 中央区)の大阪支社(現 大阪本社)で開業
昭和39年2月	商号を株式会社建設技術研究所に変更
昭和39年12月	建設省に建設コンサルタント登録(第39-133号)
昭和42年6月	福岡県福岡市に福岡出張所(現 九州支社)を開設
昭和44年4月	本社を東京都中央区日本橋小網町に移転
昭和48年9月	本社を東京都中央区日本橋本町に移転
昭和50年1月	本社に海外プロジェクトの受注拡大を図るため海外業務室(現 株式会社建設技研インターナショナル)を開設
昭和51年4月	宮城県仙台市に仙台出張所(現 東北支社)を開設
昭和51年9月	名古屋市市中村区に名古屋出張所(現 中部支社)を開設
昭和52年4月	広島県広島市に広島出張所(現 中国支社)を開設
昭和55年7月	沖縄県浦添市に沖縄出張所(現 沖縄支社)を開設
昭和58年4月	新潟県新潟市に新潟出張所(現 北陸支社)、香川県高松市に高松出張所(現 四国支社)を開設
昭和58年12月	施工管理業務などを専業させる目的でシーティーアイ調査設計株式会社(現 株式会社CTIAウラ)を設立
昭和63年6月	札幌市中央区に札幌出張所(現 北海道支社)を開設
平成元年7月	ダム、河川および砂防に関する水理模型実験を担当するフロント事業部を開設
平成3年4月	業容拡大に備えるため東京都中央区日本橋本町に東京支社(現 東京本社)を開設
平成6年4月	本社に建設工事の企画、設計から施工業者選定、施工管理までを代行する「コンストラクション・マネジメント(CM)事業」に参入するためCM本部を開設
平成6年6月	日本証券業協会に株式を店頭登録
平成8年8月	フロント事業部を改組し、茨城県つくば市に研究センターつくばを開設
平成8年10月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場
平成9年9月	福岡市中央区に九州初の免震構造の環境調和型自社ビルを建設
平成11年3月	海外部門の分離独立を目的として株式会社建設技研インターナショナルを設立
平成11年4月	株式会社建設技研インターナショナルに海外部門の営業を譲渡
平成11年6月	東京証券取引所市場第一部に株式を上場
平成11年12月	マネジメント事業などを専業させる目的で株式会社マネジメントテクノを設立
平成12年4月	マネジメント事業を担当するマネジメント事業部を開設
平成13年4月	埼玉県浦和市(現 さいたま市浦和区)に環境調和型自社ビルを建設
平成15年4月	研修、セミナー運営事業などを専業させる目的で株式会社CTIAアカデミー(現 株式会社CTIFロンティア)を設立
平成17年5月	創業60周年を期に、本社を東京都中央区日本橋浜町に移転
平成18年6月	財団法人福岡土地地区画整理協会の事業の一部を譲り受け、当社100%子会社の福岡土地地区画整理株式会社(現 福岡都市技術株式会社)が営業を開始
平成20年1月	長江科学院と共同で環境分野のコンサルティングを行う目的で武漢長建創維環境科技有限公司を設立
平成22年10月	住鉱コンサルタント株式会社(現 住鉱資源開発株式会社)の建設コンサルタント事業を当社100%子会社の株式会社地圏総合コンサルタントが承継し、営業を開始
平成26年3月	DUWUN社と合弁で建設コンサルティングを行う目的で株式会社CTIミャンマーを設立

3 【事業の内容】

当社グループは、当社（株式会社建設技術研究所）および子会社により構成されており、河川、ダム、道路、環境、情報などの公共事業に関する建設コンサルタント業を営んでおります。なお、当連結会計年度において連結子会社は3社、持分法適用会社はありません。

当社グループの事業内容および当社と主要な子会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

① 国内事業

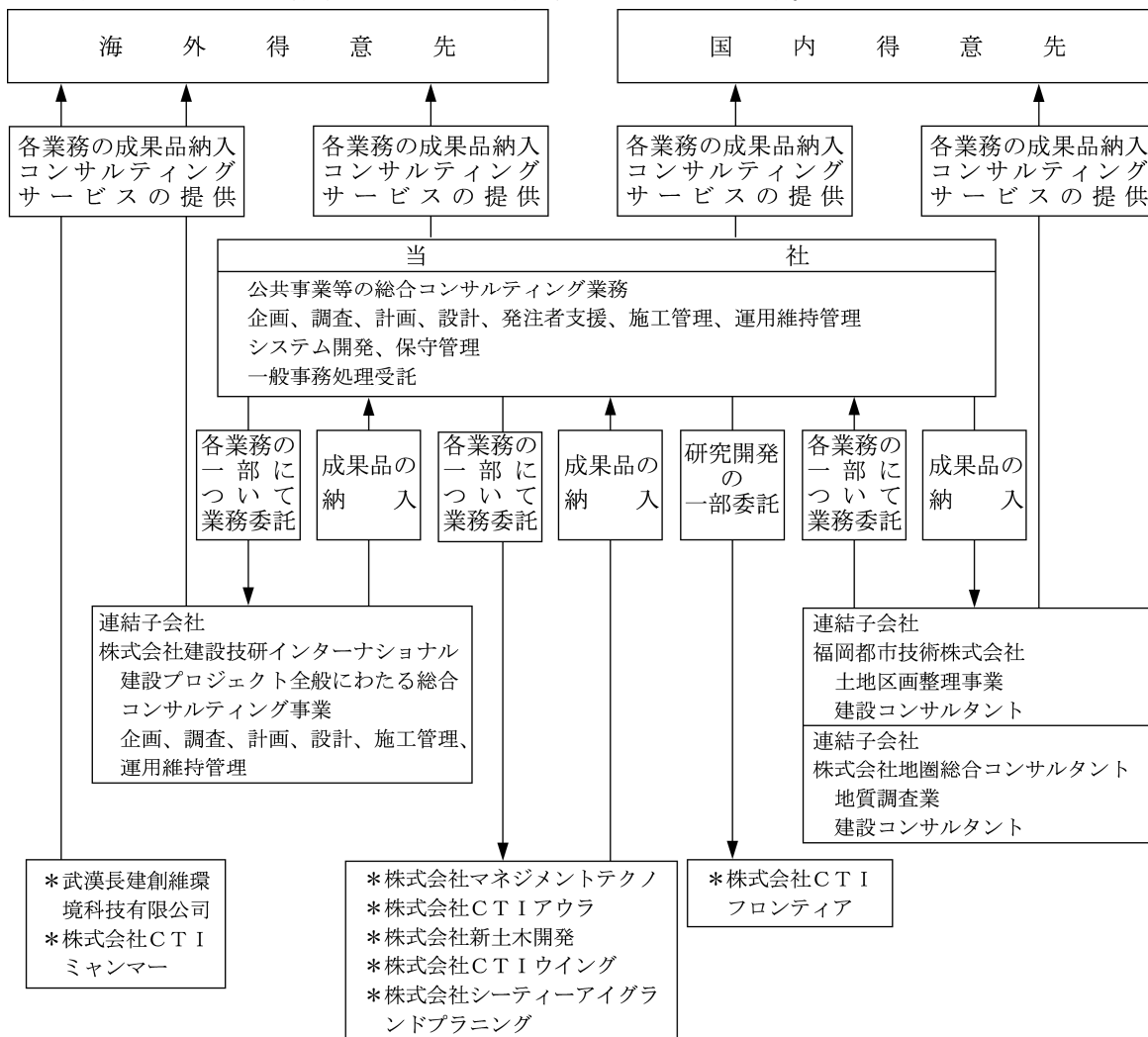
主要な業務は、国内における公共事業の企画、調査、計画、設計、発注者支援、施工管理、運用維持管理などの総合コンサルティング業務および付随するシステム開発、保守管理、一般事務処理受託ならびに土地区画整理業務であり、当社はこれら全般を担当しております。また、子会社福岡都市技術株式会社は、主に土地区画整理および都市再開発業務を、子会社株式会社地圏総合コンサルタントは、主に地質および砂防関連業務について担当しております。

② 海外事業

主要な業務は、海外におけるプロジェクトの発掘、マスタープランの策定、企画、調査、計画、設計、施工管理、運用維持管理など建設プロジェクト全般にわたる総合コンサルティング業務であり、当社および子会社株式会社建設技研インターナショナルが担当しております。

なお、中国における水環境分野へのコンサルティング業務につきましては、子会社武漢長建創維環境科技有限公司が担当しております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) *印の子会社は、規模の重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
連結子会社 株式会社建設技研 インターナショナル	東京都江東区	100	海外における建設コンサルタント	70.0	当社とともに海外における建設コンサルタント業務を受注している。 取締役の兼務および債務保証あり。
連結子会社 福岡都市技術株式会社	東京都中央区	100	建設コンサルタント、 土地区画整理	100.0	当社から建設コンサルタント業務を受注しているほか、土地区画整理業務を直接受注している。
連結子会社 株式会社地圏総合 コンサルタント	東京都荒川区	100	建設コンサルタント、 地質調査	100.0	当社から建設コンサルタント業務を受注しているほか、地質調査業務を直接受注している。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成26年12月31日現在

従業員数(名)	1,652(496)
---------	------------

(注) 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は()内に年間平均人員を外数で記載しております。

(2) 提出会社の状況

平成26年12月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
1,315(443)	42.93	13.71	8,266,751

(注) 1 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は()内に年間平均人員を外数で記載しております。

2 平均年間給与は、賞与および基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

提出会社には、労働組合が以下のとおり組織されております。

- ① 組合名 建設技研労働組合
- ② 所属上部団体 全国建設関連産業労働組合連合会
- ③ 組合員数 784人(平成26年12月31日現在)
- ④ その他 特記すべき事項はなく、労使関係は相互信頼により安定的に維持されております。

第2 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

(1) 業績

当社グループの属する建設コンサルタント産業においては、政府の経済成長戦略を受けて公共投資が底堅く推移するなかで、公共事業を適正かつ着実に推進するための各種法制度の改正や技術者単価の上昇などもあり、事業環境の改善がみられました。

とりわけ公共工事の品質確保の促進に関する法律（品確法）の改正ならびにその基本方針改正が閣議決定され、中長期的な担い手の確保のための施策や技術評価によるコンサルタント選定の拡大、調査および設計の品質確保に向けた資格制度確立への動きなどの具体化が進みました。

このような状況下にあつて、引き続き東日本大震災からの復興事業に総力を挙げて取り組むとともに、防災・減災事業、社会資本の維持管理や更新に関する事業等を中心に積極的に対応してまいりました。また、技術力により契約先を選定するプロポーザル方式に対して当社の優位性を発揮するとともに、価格競争力も併せて強化することにより、受注の確実な確保を図りました。

当社の連結子会社においては、海外を市場とする株式会社建設技研インターナショナルは、主力の東南アジアにおけるODA事業に加え、中央アジア等の周辺地域のプロジェクトの受注も着実に増加しています。土地区画整理や都市再開発を市場とする福岡都市技術株式会社は、震災復興に加えて従前の市場の回復や民間市場への展開がみられ、砂防や土質調査に強みを持つ株式会社地圏総合コンサルタントは、防災・減災関連事業への積極的な展開を行うなど、好調に推移しました。

これらの結果、当連結会計年度における当社グループの受注高は40,348百万円と前年同期比6.3%減となりました。完成業務収入は39,524百万円と前年同期比8.5%増となり、生産の効率的な実施による原価率の改善等を要因として、経常利益は2,525百万円と前年同期比54.1%増、当期純利益は1,490百万円と前年同期比51.7%増となりました。

(2) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、前連結会計年度末に比べ4,067百万円増加し、12,659百万円となりました。

営業活動の結果取得した資金は3,591百万円（前連結会計年度比19.2%増）となりました。これは主に税金等調整前当期純利益2,537百万円、未成業務受入金の増加額1,588百万円、未成業務支出金の増加による減少額649百万円によるものであります。

投資活動の結果取得した資金は568百万円（前連結会計年度比―）となりました。これは主に投資有価証券の売却による収入540百万円によるものであります。

財務活動の結果使用した資金は108百万円（前連結会計年度比―）となりました。これは主に配当金による支出254百万円、短期借入金の借入による純収入250百万円、リース債務の返済による支出103百万円によるものであります。

2 【生産、受注及び販売の状況】

当社グループの事業は、建設コンサルタントならびにこれらの付帯業務の単一事業であり、当該事業以外に事業の種類がないため、単一のセグメントで表示しております。

(1) 生産実績

区分	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日) (百万円)	前年同期比(%)
建設コンサルタント	39,524	8.5
合計	39,524	8.5

(注) 金額は、販売価額によっております。

(2) 受注状況

区分	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)			
	受注高(百万円)	前年同期比(%)	受注残高(百万円)	前年同期比(%)
建設コンサルタント	40,348	△6.3	42,602	2.0
合計	40,348	△6.3	42,602	2.0

(注) 金額は、販売価額によっております。

(3) 販売実績

1) 販売実績

区分	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日) (百万円)	前年同期比(%)
建設コンサルタント	39,524	8.5
合計	39,524	8.5

(注) 金額は、販売価額によっております。

2) 主要顧客別販売実績

当連結会計年度のうち、総販売実績に対する割合が10%以上の販売先は次のとおりであります。

販売先	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)		当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
国	16,983	46.6	20,582	52.1

3 【対処すべき課題】

平成27年度の本予算は、増税による税収増加が先送りされたにもかかわらず、平成26年度予算から微増となり、昨年来の予算の下げ止まりを確実なものにしました。成長戦略による景気回復はこれから本格化すると見込まれ、国土強靱化基本計画による社会資本整備に対する計画的な投資、改正品確法の本格的な運用実施などにより、これまでもまして建設コンサルタントの役割が重要となってまいります。

こうした事業環境を踏まえて、当社グループは新たなステージに向かう礎として、いかなる事業環境の変化にも柔軟に対応できる事業基盤を構築するべく、以下の重点施策を推進してまいります。

- ① 受注と利益の安定的な確保
- ② 技術開発と新たな事業展開の促進
- ③ 多様な人材の確保と育成
- ④ 品質管理の戦略的な推進
- ⑤ 経営・生産システムの改革

役員ならびに社員一同、国民の安心・安全を担う建設コンサルタントの社会的使命を果たすため、最大限の努力を続けてまいり所存です。

4 【事業等のリスク】

当社の受注は、公共事業に大きく依存しており、その動向により当社の経営成績は影響を受ける可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当社グループは、国内および海外において事業を展開しており、これに必要な研究開発を進めております。

具体的な投資は、新分野の開拓および新事業の開発（戦略的研究、国際研究、事業化研究）、国土文化研究、技術開発および人材開発に分かれております。

当連結会計年度において、総額668百万円を投入し、主に以下のテーマの研究開発を進めております。

- ① 戦略的研究（防災まちづくり研究、C I M研究、インフラメンテナンス研究）
- ② 国際研究（国際ビジネス推進）
- ③ 事業化研究（ダムによる水力発電参入、物流事業化検討、地方創生におけるP F I・P P P事業展開、都市土木事業展開、国内外におけるスマートコミュニティ事業化展開、C M・P M業務に関する事業展開、農業関連事業開発、未参入分野の事業展開）
- ④ 国土文化研究（シンクタンク、コンパクトシティ、社会資本投資便益、気象変動適応策、女性技術者支援、心の健康都市、子どもを育む環境、景観デザイン、水辺再生、まちニワ実現化、価値共創、農業技術、ビッグデータ活用、文化財防災支援）
- ⑤ 技術開発研究（P D C A型維持管理、グラウチング合理化、三次元水理解析技術、貯水池洪水機構、構造物センシング技術、自転車ユーザービリティ、交通挙動モデル開発、トンネルセンシング、国土マネジメント、環境調査の三次元化、大型車I T S、洋上風力事業化F S、水中ロボット開発、点検ロボット開発）
- ⑥ 人材開発（社内外の研修、社会人大学院派遣、海外研修派遣等）

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

（1）財政状態の分析

（資産）

当連結会計年度末における総資産は41,011百万円と前年同期比10.4%増となりました。これは主に受託料収入等による有価証券の増加によるものであります。

（負債）

当連結会計年度末における総負債は19,140百万円と前年同期比21.6%増となりました。これは主に未成業務受入金および会計基準変更に伴う退職給付引当金の減少と退職給付に係る負債の増加によるものであります。

（純資産）

当連結会計年度末における純資産は21,870百万円と前年同期比2.2%増となりました。これは主に当期純利益および会計基準変更に伴う退職給付に係る調整累計額の計上によるものであります。

（2）経営成績の分析

当連結会計年度における当社グループの受注高は40,348百万円と前年同期比6.3%の減少となりました。完成業務収入は39,524百万円と前年同期比8.5%増、経常利益は2,525百万円と前年同期比54.1%増、当期純利益は1,490百万円と前年同期比51.7%増となりました。

（3）キャッシュ・フローの分析

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、前連結会計年度末に比べ4,067百万円増加し、12,659百万円となりました。

営業活動の結果取得した資金は3,591百万円（前連結会計年度比19.2%増）となりました。これは主に税金等調整前当期純利益2,537百万円、未成業務受入金の増加額1,588百万円、未成業務支出金の増加による減少額649百万円によるものであります。

投資活動の結果取得した資金は568百万円（前連結会計年度比―）となりました。これは主に投資有価証券の売却による収入540百万円によるものであります。

財務活動の結果使用した資金は108百万円（前連結会計年度比―）となりました。これは主に配当金による支出254百万円、短期借入金の借入による純収入250百万円、リース債務の返済による支出103百万円によるものであります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループでは、主に事業所の執務環境整備のための改修工事等に130百万円の設備投資を実施致しました。
なお、当連結会計年度中に生産能力に重要な影響を及ぼす設備投資、設備の売却および撤去などはありません。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

平成26年12月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
		建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他	合計	
本社 (東京都中央区)	統括業務施設	10	—	—	11	23	45	102 (3)
東京本社 (東京都中央区)	事務所	74	—	—	13	49	137	374 (115)
東京本社 さいたまオフィス (さいたま市浦和区)	事務所	718	0	772 (1,978)	16	7	1,515	129 (76)
研究センターつくば (茨城県つくば市)	事務所および 実験施設	273	8	1,937 (50,605)	2	8	2,230	40 (14)
与野寮 (さいたま市中央区)	厚生施設	210	—	820 (1,565)	—	0	1,030	— (—)
九州支社 (福岡市中央区)	事務所	337	1	1,025 (1,136)	25	20	1,410	126 (21)

(注) 1 研究センターつくばの土地面積には、連結会社以外から賃借している土地14,895㎡が含まれております。
2 臨時雇用者数は()内に年間平均人員を外数で記載しております。

(2) 国内子会社

主要な設備はありません。

(3) 在外子会社

該当事項はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末現在における重要な設備の新設、除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	40,000,000
計	40,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成26年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成27年3月27日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	14,159,086	14,159,086	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数 100株
計	14,159,086	14,159,086	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成11年2月19日(注)	1,287,189	14,159,086	—	3,025	—	4,122

(注) 株式分割(1:1.1)による増加

(6) 【所有者別状況】

平成26年12月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満株式の状況(株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	—	28	30	78	77	6	2,820	3,039	—
所有株式数(単元)	—	36,657	2,855	14,202	17,946	204	69,425	141,289	30,186
所有株式数の割合(%)	—	26.0	2.0	10.1	12.7	0.1	49.1	100.0	—

- (注) 1 自己株式18,071株は、「個人その他」に180単元および「単元未満株式の状況」に71株を含めて記載しております。
- 2 上記「その他の法人」および「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式がそれぞれ41単元および72株含まれております。

(7) 【大株主の状況】

平成26年12月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
建設技術研究所従業員持株会	東京都中央区日本橋浜町3丁目21-1	1,550	11.0
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	547	3.9
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	384	2.7
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2丁目7番1号	371	2.6
三菱UFJ信託銀行株式会社 (常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内1丁目4番5号 (東京都港区浜松町2丁目11番3号)	354	2.5
住友生命保険相互会社 (常任代理人 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社)	東京都中央区築地7丁目18-24 (東京都中央区晴海1丁目8番11号)	300	2.1
第一生命保険株式会社 (常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区有楽町1丁目13-1 (東京都中央区晴海1丁目8-12)	269	1.9
DEUTSCH BANK AG LONDON-PB NON-TREATY CLIENTS 613 (常任代理人 ドイツ証券株式会社)	TAUNUSANLAGE 12, D-60325 FRANKFURT AM MAIN, FEDERAL REPUBLIC OF GERMANY (東京都千代田区永田町2丁目6番6号)	236	1.7
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内1丁目6番6号	188	1.3
CBNY DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO (常任代理人 シティバンク銀行株式会社)	388 GREENWICH STREET, NY, NY10013, USA (東京都新宿区新宿6丁目27番30号)	184	1.3
計	—	4,387	31.0

- (注) 日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)の所有株式のうち111千株および日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)の所有株式のうち421千株は、信託業務に係る株式であります。

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成26年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 18,000	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 14,110,900	141,109	—
単元未満株式	普通株式 30,186	—	—
発行済株式総数	14,159,086	—	—
総株主の議決権	—	141,109	—

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」には、証券保管振替機構名義の株式が4,100株(議決権の数41個)含まれております。

2 「単元未満株式」には、当社所有の自己株式が71株含まれております。

② 【自己株式等】

平成26年12月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
株式会社建設技術研究所	東京都中央区日本橋浜町 3-21-1	18,000	—	18,000	0.1
計	—	18,000	—	18,000	0.1

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	334	424,484
当期間における取得自己株式	38	56,278

(注) 当期間における取得自己株式には、平成27年3月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数を含んでおりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	18,071	—	18,109	—

(注) 当期間における保有自己株式には、平成27年3月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数を含んでおりません。

3 【配当政策】

当社は、配当につきましては株主総会で決議することとしております。また、当社定款に会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことができる旨の規定はありますが、年1回の配当を基本としております。

配当の決定にあたっては、利益還元の充実とともに公共性の高い業務に携わる建設コンサルタントとして、安定した経営に不可欠な適正な内部留保の確保が必要と考えております。内部留保につきましては、今後の成長が見込める公共事業の新しい事業執行システムに対応した業務や環境、都市、新エネルギーなどの新技術分野への先行投資および事業拡大のために必要な資金に充当してまいり所存です。

今後も安定配当を基本としつつ、配当性向も考慮した利益の還元を目指します。

(注) 平成26年12月31日を基準日とする配当につきましては、平成27年3月26日開催の第52回定時株主総会において、1株当たり18円（配当総額254百万円）とすることを決議しております。

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第48期	第49期	第50期	第51期	第52期
決算年月	平成22年12月	平成23年12月	平成24年12月	平成25年12月	平成26年12月
最高(円)	515	670	644	1,080	1,942
最低(円)	388	399	445	564	958

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成26年7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高(円)	1,409	1,870	1,865	1,942	1,795	1,683
最低(円)	1,124	1,268	1,612	1,535	1,536	1,532

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員の状況】

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 会長		大 島 一 哉	昭和21年7月8日	昭和44年4月 平成3年4月 平成6年4月 平成7年3月 平成9年4月 平成10年3月 平成11年4月 平成12年3月 平成13年3月 平成14年3月 平成15年3月 平成25年3月	当社入社 当社東京支社技術第五部長 当社東京支社文化技術本部長 当社取締役 当社東京支社副社長 当社常務取締役 当社東京支社長 当社専務取締役 当社取締役副社長 当社代表取締役副社長 当社代表取締役社長 当社代表取締役会長(現任)	注1	99
代表取締役 社長		村 田 和 夫	昭和26年9月26日	昭和53年4月 平成9年4月 平成11年4月 平成13年4月 平成15年3月 平成16年4月 平成18年3月 平成21年4月 平成22年3月 平成23年3月 平成23年4月 平成25年3月	当社入社 当社東京支社河川本部技術第五部長 当社東京支社河川本部長 当社東京本社次長 当社取締役、技術管理本部長 当社経営企画部長兼管理本部副部長 当社常務取締役、管理本部長 当社九州支社長兼沖縄支社長 当社取締役、常務執行役員 当社専務執行役員 当社東京本社社長 当社代表取締役社長(現任)	注1	43
代表取締役 副社長執行役員	企画本部長	小 松 泰 樹	昭和26年10月15日	昭和51年4月 平成10年4月 平成11年4月 平成13年4月 平成15年3月 平成15年4月 平成18年3月 平成21年4月 平成22年3月 平成23年3月 平成25年3月 平成25年4月 平成27年3月	当社入社 当社東京支社道路本部道路計画部長 当社東京支社道路本部長 当社東京本社次長 当社取締役 当社東京本社副本社長 当社常務取締役、中部支社長 当社営業本部長 当社取締役、常務執行役員 当社専務執行役員 当社副社長執行役員(現任) 当社企画本部長(現任) 当社代表取締役(現任)	注1	43
取締役 専務執行役員	東京本社社長	兪 朝 夫	昭和30年1月17日	昭和54年4月 平成9年4月 平成15年3月 平成17年3月 平成17年4月 平成18年3月 平成21年4月 平成22年3月 平成23年3月 平成25年3月 平成25年4月	当社入社 当社東京支社名古屋支店技術部長 当社東京本社次長 当社取締役 当社東京本社副本社長 当社経営企画部長 当社中部支社長 当社執行役員 当社取締役(現任)、常務執行役員、大阪本社社長 当社専務執行役員(現任) 当社東京本社社長(現任)	注1	27
取締役 専務執行役員	技術本部長	棚 橋 通 雄	昭和27年7月27日	平成24年10月 平成24年11月 平成25年3月 平成25年4月 平成26年3月	財団法人ダム水源地環境整備センター常勤理事退任 当社入社、理事 当社取締役(現任)、常務執行役員 当社技術本部長(現任) 当社専務執行役員(現任)	注1	5

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役 常務執行役員	営業本部長	友 永 則 雄	昭和28年9月15日	昭和54年4月 平成10年4月 平成16年4月 平成18年3月 平成22年3月 平成23年3月 平成25年3月 平成25年4月	当社入社 当社東京支社道路本部技術第四部長 当社東京本社次長 当社取締役、東京本社副本社長 当社執行役員 当社取締役(現任)、中部支社長 当社常務執行役員(現任) 当社営業本部長(現任)	注1	34
取締役 常務執行役員	大阪本社長	栗 田 秀 明	昭和29年1月1日	昭和55年4月 平成10年4月 平成16年4月 平成17年4月 平成18年3月 平成21年4月 平成22年3月 平成23年3月 平成25年3月 平成25年4月	当社入社 当社大阪支社広島支店技術部長 当社大阪支社次長 当社大阪本社副本社長 当社取締役 当社管理本部長 当社執行役員 当社取締役(現任) 当社常務執行役員(現任) 当社大阪本社長(現任)	注1	27
取締役 執行役員	管理本部長	寺 井 和 弘	昭和31年2月28日	昭和56年4月 平成11年4月 平成15年4月 平成19年4月 平成24年3月 平成24年4月 平成25年3月 平成25年4月	当社入社 当社大阪支社環境本部環境対策部長 当社マネジメント事業部長 当社東京本社次長 当社執行役員(現任) 当社東京本社副本社長 当社取締役(現任) 当社管理本部長(現任)	注1	15
取締役 執行役員	九州支社長 兼沖縄支社長	中 村 哲 己	昭和32年3月4日	昭和52年4月 平成14年4月 平成18年4月 平成21年4月 平成22年3月 平成23年4月 平成25年3月 平成27年3月	当社入社 当社東京本社河川部長 当社東京本社次長 当社東京本社副本社長 当社執行役員(現任) 当社東北支社長 当社取締役(現任) 当社九州支社長兼沖縄支社長 (現任)	注1	17
取締役 執行役員	(国際担当)	佐々部 圭 二	昭和27年3月7日	昭和63年3月 昭和63年4月 平成11年7月 平成18年3月 平成20年3月 平成21年3月 平成27年3月	株式会社中央開発インターナショナル退職 当社入社 株式会社建設技研インターナショナル 転籍、事業本部技術第4部長 株式会社建設技研インターナショナル 取締役 株式会社建設技研インターナショナル 常務取締役 株式会社建設技研インターナショナル 代表取締役社長(現任) 当社取締役、執行役員(現任)	注2	0
取締役 執行役員	中部支社長	中 平 明 憲	昭和28年4月14日	平成6年3月 平成6年4月 平成11年4月 平成21年4月 平成22年3月 平成24年4月 平成27年3月	株式会社中堀ソイルコーナー退職 当社入社 当社大阪本社道路本部技術第四部長 当社大阪本社副本社長 当社執行役員(現任) 福岡都市技術株式会社代表取締役社長 当社取締役、中部支社長(現任)	注2	14

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
常勤監査役		唐 裕 一	昭和30年3月2日	昭和52年4月 平成12年4月 平成20年4月 平成23年4月 平成27年3月	当社入社 当社中部支社技術第一部長 当社技術本部業務管理部長 当社管理本部人材開発室長 当社常勤監査役(現任)	注3	0
監査役		谷 和 弘	昭和28年2月27日	昭和52年4月 平成12年4月 平成20年4月 平成23年4月 平成25年3月 平成27年3月	当社入社 当社東京支社道路本部技術第二部長 当社管理本部秘書室長 当社技術本部開発企画部長 当社常勤監査役 当社監査役(現任)	注4	20
監査役		堀 内 国 宏	昭和18年4月24日	昭和43年4月 平成4年4月 平成8年4月 平成9年6月 平成11年4月 平成12年3月 平成22年4月	検事任官 東京高等検察庁検事 最高検察庁検事 弁護士登録(現任) 東海大学法学部教授 当社監査役(現任) 流通経済大学法学部教授	注3	—
監査役		田 中 康 郎	昭和21年2月9日	昭和46年4月 昭和56年4月 昭和60年4月 平成6年4月 平成15年2月 平成17年2月 平成21年3月 平成23年2月 平成23年4月 平成27年3月	判事補任官 東京地方裁判所判事 国連アジア極東犯罪防止研修所研修部長 東京地方裁判所部総括判事 盛岡地方・家庭裁判所長 東京高等裁判所部総括判事 札幌高等裁判所長官 弁護士登録(現任) 明治大学法科大学院教授(現任) 当社監査役(現任)	注3	—
計							350

- (注) 1 平成26年3月27日から平成27年12月31日に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
2 平成27年3月26日から平成27年12月31日に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
3 平成27年3月26日から平成30年12月31日に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
4 平成25年3月27日から平成28年12月31日に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
5 監査役 堀内国宏および田中康郎は、社外監査役であります。
6 法令に定める監査役の員数の要件を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第2項に定める補欠監査役を選任しております。補欠監査役の略歴は以下のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
由 布 節 子	昭和27年3月28日	昭和56年4月 平成14年1月 平成22年4月	弁護士登録(現任) 渥美・臼井法律事務所(現 渥美坂井法律事務所・外国法事業共同事業)シニアパートナー(現任) 慶応義塾大学法科大学院非常勤講師	注1	—

- (注) 1 平成27年3月26日から平成30年12月31日に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時まで
2 補欠監査役 由布節子は、社外監査役の要件を満たしております。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

1) コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

経営の基本方針に示すとおり、建設コンサルタントは、人類の発展に不可欠なインフラストラクチャの整備の一翼を担っております。当社は、建設コンサルタントの一員として中立・独立性を確保して業務を遂行し、インフラストラクチャの利用者である国民の利益を守ることを経営の基本方針としております。このため、当社は経営の透明性と内部統制の実効性を高めることが必要であると考えております。

2) コーポレート・ガバナンスに関する施策の実施状況

①会社の機関の内容

取締役会は、原則として月1回開催され、法令で定められた事項およびその他の経営に関する重要事項を決定するとともに、業務執行を監督しております。また、社内外の課題について長時間にわたり活発な議論が行われております。

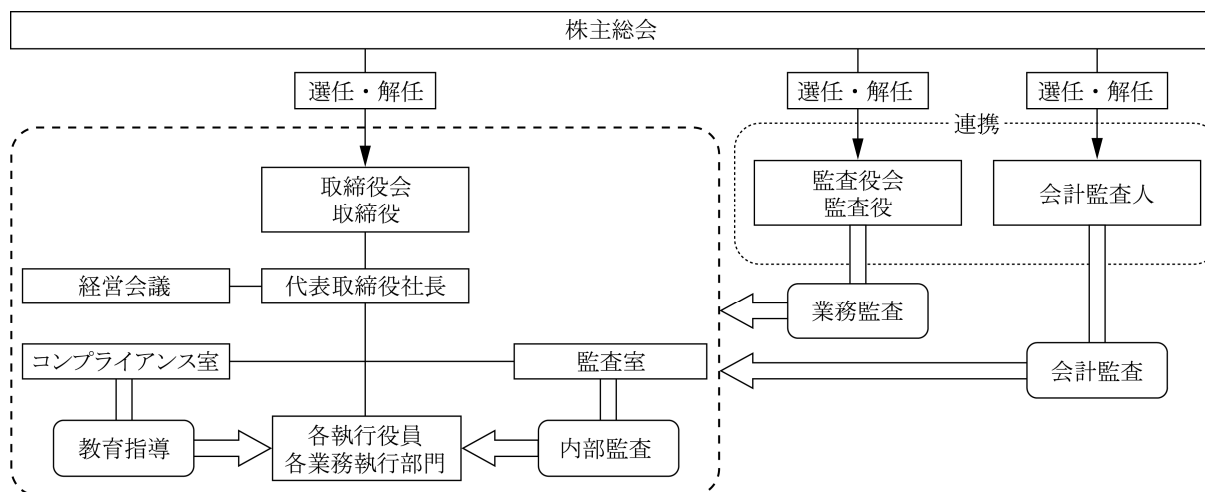
当社は、監査役制度を採用しており、監査役は取締役会の他、社内の重要な会議に出席するなど独立した立場から業務執行を監査しております。なお、監査役4名のうち、社外監査役として弁護士を2名選任しております。

また、社長の諮問機関として設置された経営会議は、本社の本部長、事業所の代表等で構成されており、原則として月1回開催されています。経営会議では、社長の業務執行につき必要な事項について協議または答申しております。

なお、当社では、平成22年3月に執行役員制度を導入し、監督と執行の機能を明確化するとともに意思決定の迅速化を図る体制を構築しております。

当社の体制は、社外監査役を含めた監査役による業務執行に対する監査体制と、執行役員制度導入により取締役会の監督機能を明確化したことにより、業務執行の監督・監視機能を十分に果たすことができると考えております。

なお、当社の機関の概要は、以下のとおりであります。



②リスク管理体制の整備の状況

当社のリスク管理体制は、品質に関する事項は技術本部、それ以外の事項は管理本部で対応しております。

③ 社外取締役および社外監査役との関係

社外監査役2名と当社との間には、人的関係、資金的関係または取引関係その他の利害関係はありません。

当社は、社外監査役として弁護士2名を選任しております。これは、弁護士の高い専門性と職業倫理を活用しようとするものであり、意思決定の早い段階において積極的にアドバイスを受け、監査役制度をより実効あるものとしております。加えて、社外監査役として独立した立場と客観的視点から当社の経営を監視し、取締役会の内外において的確な助言、提言を行い、適正に職責を全うしていることなどから、独立性を堅持していると判断しております。また、社外監査役のうち1名と顧問弁護士契約を締結しております。

監査役4名のうち社外監査役は2名と監査役の員数の2分の1にあたり、当社の経営を監視する上で適正な員数と考えております。

当社は社外取締役を選任しておりません。執行役員制度導入により、当社は、取締役会の意思決定機能および業務執行を監督する機能を強化しております。加えて、監査役4名のうち2名を社外監査役として、外部からの客観的、中立的な経営監視機能を強化しております。さらに、社外監査役は、2名ともほぼすべての監査役会に出席し、コーポレート・ガバナンスにおいて重要な外部からの客観的、中立的な経営監視機能が十分に機能する体制が整っているため、現状の体制を採用しております。

社外役員を選任するための独立性に関する基準または方針はありませんが、東京証券取引所の独立役員の独立性に関する判断基準等を参考としており、田中康郎を独立役員として同取引所に届け出ております。

④ 内部統制システムの整備の状況

社長直属のコンプライアンス室および監査室を設置し、内部統制の強化により法令遵守の体制を構築しております。なお、社外監査役の弁護士1名に社外の相談窓口を依頼しており、内部通報体制の充実を図っております。また、内部統制部門である監査室およびコンプライアンス室は社外監査役も出席する監査役会と定期的に協議を行い、連携を図っております。

さらに、監査役会は、会計監査人とも、定期的に協議を行い、連携を図っており、業務監査と会計監査の相互強化を図っております。

加えて、当社は、会計監査人からも適宜アドバイスを受け、問題の発生を未然に防止しております。

⑤ 内部監査および監査役監査、会計監査の状況

内部監査は、監査室が担当しており、監査室の要請に基づく補助者を加えて実施しております。その人員は、監査室2名、補助者3名であります。具体的には、年間計画に基づき全部門にわたり実査を中心に業務全般の監査を実施しております。

監査役監査は、監査役会の指示に基づく補助者を加えて実施しております。また、社外監査役を含む監査役は意思決定の早い段階から積極的に関与しており、監査役制度をより実効あるものとしております。加えて、社外監査役も出席する監査役会と会計監査人は適宜協議を行うなど連携しており、業務監査と会計監査の相互強化を図っております。内部統制についても、取締役会の他、社内の重要な会議に参加し報告を受けるとともに、必要に応じて説明を求め、業務の適正の確保に努めております。

会計監査は、会計監査人として有限責任監査法人トーマツと監査契約を締結しております。当連結会計年度において監査業務を行った公認会計士は北方宏樹および滝沢勝己であり、両名とも平成25年3月より担当しております。監査に係る補助者は、公認会計士8名を含む15名であります。

⑥役員報酬等

イ. 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額および対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	289	260	28	—	11
監査役 (社外監査役を除く。)	27	27	—	—	2
社外役員	10	10	—	—	2

ロ. 報酬等の総額が1億円以上である者の報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

ハ. 使用人兼務役員の使用人給与のうち、重要なもの

総額(百万円)	対象となる 役員の員数(名)	内容
28	2	使用人を兼務しているため。

ニ. 役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針の内容および決定方法

特に決定しておりません。

⑦株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

銘柄数 35銘柄
貸借対照表計上額の合計額 1,631百万円

ロ、保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
(前事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
ライト工業株式会社	265,100	204	安定株主を確保するため
応用地質株式会社	98,500	158	安定株主を確保するため
ショーボンドホールディングス株式会社	23,500	113	安定株主を確保するため
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	145,000	100	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社長大	105,000	78	安定株主を確保するため
E・Jホールディングス株式会社	60,340	69	安定株主を確保するため
日本上下水道設計株式会社	50,000	64	安定株主を確保するため
株式会社T&Dホールディングス	38,400	56	安定的な取引関係を維持継続するため
日本アジアグループ株式会社	72,480	52	安定株主を確保するため
株式会社ウエスコ	180,000	44	安定株主を確保するため
株式会社ACKグループ	57,200	43	安定株主を確保するため
宇部興産株式会社	190,400	42	安定株主を確保するため
アジア航測株式会社	102,000	38	安定株主を確保するため
前澤化成工業株式会社	36,000	38	安定株主を確保するため
川田テクノロジーズ株式会社	12,000	33	安定株主を確保するため
大日本コンサルタント株式会社	100,000	29	安定株主を確保するため
川崎地質株式会社	47,000	24	安定株主を確保するため
西日本システム建設株式会社	74,000	22	安定株主を確保するため
株式会社千葉銀行	30,000	21	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社みずほフィナンシャルグループ	81,000	18	安定的な取引関係を維持継続するため
いであ株式会社	17,000	17	安定株主を確保するため
株式会社桑山	26,400	15	安定株主を確保するため
株式会社オオバ	64,200	13	安定株主を確保するため
株式会社福山コンサルタント	34,100	11	安定株主を確保するため
アリアケジャパン株式会社	1,829	4	安定株主を確保するため
第一生命保険株式会社	2,600	4	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社内田洋行	16,000	4	安定株主を確保するため
株式会社イチネンホールディングス	1,844	1	安定株主を確保するため
日本工営株式会社	1,155	0	安定株主を確保するため

(当事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
ライト工業株式会社	265,100	279	安定株主を確保するため
応用地質株式会社	98,500	181	安定株主を確保するため
ショーボンドホールディングス株式会社	23,500	110	安定株主を確保するため
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	145,000	96	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社長大	105,000	80	安定株主を確保するため
日本上下水道設計株式会社	50,000	75	安定株主を確保するため
いであ株式会社	54,800	72	安定株主を確保するため
株式会社オオバ	186,000	65	安定株主を確保するため
株式会社ウエスコホールディング	180,000	61	安定株主を確保するため
E・Jホールディングス株式会社	60,340	60	安定株主を確保するため
株式会社T&Dホールディングス	38,400	55	安定的な取引関係を維持継続するため
アジア航測株式会社	102,000	51	安定株主を確保するため
川田テクノロジーズ株式会社	12,000	48	安定株主を確保するため
前澤化成工業株式会社	36,000	43	安定株主を確保するため
大日本コンサルタント株式会社	100,000	40	安定株主を確保するため
株式会社ACKグループ	57,200	40	安定株主を確保するため
宇部興産株式会社	190,400	34	安定株主を確保するため
株式会社SYSKEN	74,000	26	安定株主を確保するため
川崎地質株式会社	47,000	25	安定株主を確保するため
株式会社桑山	26,400	23	安定株主を確保するため
株式会社千葉銀行	30,000	23	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社福山コンサルタント	34,100	17	安定株主を確保するため
株式会社みずほフィナンシャルグループ	81,000	16	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社内田洋行	16,000	6	安定株主を確保するため
アリアケジャパン株式会社	1,829	5	安定株主を確保するため
第一生命保険株式会社	2,600	4	安定的な取引関係を維持継続するため
株式会社イチネンホールディングス	1,844	1	安定株主を確保するため
日本工営株式会社	1,155	0	安定株主を確保するため

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

3) 会社のコーポレート・ガバナンスの充実に向けた取組みの最近1年間における実施状況

平成26年12月期は、取締役会を13回、監査役会を12回開催しております。

コンプライアンス体制を強化するため、平成18年5月には会社法第362条第4項第6号に定める事項（内部統制システムに関する事項）を決議し、平成20年4月にはその改正を行いました。今後とも、鋭意その充実にめざしております。

また、インサイダー情報の適切な管理、投資家向説明会の開催、取材およびホームページによる広報等へ積極的に対応するなど会社情報の適時適切な情報開示により透明な経営を推進しております。

4) 会社法第427条第1項に定める契約（いわゆる責任限定契約）に関する事項

該当事項はありません。

5) 取締役の選解任に関する事項

当社の取締役の定員は12名であり、資格要件はありません。その選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款で定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。なお、解任決議は、会社法に定める要件を変更していません。

6) 会社法第309条第2項に定める決議（いわゆる特別決議）に関する事項

当社は、会社法第309条第2項に定める決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款で定めております。これは、株主総会において定足数を確保できずに、議案を付議することができない事態を回避するためのものです。

7) 株主総会決議事項を取締役会で決議することができるとした事項およびその理由

会社法第454条第5項に規定する剰余金の配当に関しましては、取締役会で決議する旨定めております。その理由は、会社法第454条第5項に規定する剰余金の配当を行うためには、会社法第454条第5項において取締役会の決議によって行うことができる旨定款に定める必要があるためであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	29	—	29	—
連結子会社	—	—	—	—
計	29	—	29	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

監査日数等を勘案した上で決定しております。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（平成26年1月1日から平成26年12月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報については、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成24年9月21日内閣府令第61号）附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当事業年度（平成26年1月1日から平成26年12月31日まで）の財務諸表に含まれる比較情報については、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成24年9月21日内閣府令第61号）附則第2条第2項により、改正前の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（自平成26年1月1日至平成26年12月31日）の連結財務諸表および事業年度（自平成26年1月1日至平成26年12月31日）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、または会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制の整備をするため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、積極的に情報収集に努めております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,390	2,657
受取手形及び完成業務未収入金	2,301	1,700
有価証券	5,502	10,001
未成業務支出金	12,843	13,493
繰延税金資産	413	616
その他	427	454
貸倒引当金	△13	△11
流動資産合計	24,865	28,912
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	4,518	4,561
減価償却累計額	△2,689	△2,775
建物及び構築物（純額）	1,828	1,786
機械装置及び運搬具	245	245
減価償却累計額	△232	△234
機械装置及び運搬具（純額）	13	10
土地	4,584	4,584
リース資産	408	364
減価償却累計額	△213	△190
リース資産（純額）	195	174
その他	938	999
減価償却累計額	△791	△837
その他（純額）	146	162
有形固定資産合計	6,768	6,718
無形固定資産		
リース資産	21	25
その他	202	217
無形固定資産合計	223	243
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 2,192	※1 1,917
繰延税金資産	160	408
前払年金費用	1,129	—
退職給付に係る資産	—	1,050
その他	※1 1,791	※1 1,778
貸倒引当金	△0	△17
投資その他の資産合計	5,274	5,136
固定資産合計	12,266	12,098
資産合計	37,132	41,011

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
負債の部		
流動負債		
業務未払金	1,618	1,457
短期借入金	600	850
リース債務	92	81
未払法人税等	706	722
未成業務受入金	9,204	10,792
賞与引当金	534	1,108
役員賞与引当金	21	28
業務損失引当金	95	106
その他	1,843	2,113
流動負債合計	14,717	17,260
固定負債		
長期未払金	104	104
リース債務	132	125
繰延税金負債	—	2
退職給付引当金	601	—
退職給付に係る負債	—	1,463
資産除去債務	121	126
その他	63	57
固定負債合計	1,022	1,879
負債合計	15,740	19,140
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,025	3,025
資本剰余金	4,122	4,122
利益剰余金	13,620	14,856
自己株式	△11	△11
株主資本合計	20,757	21,992
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	523	611
退職給付に係る調整累計額	—	△829
その他の包括利益累計額合計	523	△218
少数株主持分	111	96
純資産合計	21,392	21,870
負債純資産合計	37,132	41,011

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
売上高	36,435	39,524
売上原価	27,357	29,147
売上総利益	9,077	10,377
販売費及び一般管理費	※1, ※2 7,558	※1, ※2 7,988
営業利益	1,519	2,388
営業外収益		
受取利息	21	14
受取配当金	21	31
受取家賃	34	34
受取保険配当金	21	6
為替差益	6	21
その他	41	41
営業外収益合計	145	150
営業外費用		
支払利息	3	5
支払手数料	6	5
設立50周年記念事業費	15	—
その他	1	2
営業外費用合計	25	13
経常利益	1,638	2,525
特別利益		
投資有価証券売却益	—	22
固定資産売却益	※3 166	※3 —
特別利益合計	166	22
特別損失		
固定資産処分損	※4 12	※4 4
リース解約損	14	1
投資有価証券評価損	34	5
地中障害物撤去負担額	31	—
その他	0	—
特別損失合計	93	10
税金等調整前当期純利益	1,712	2,537
法人税、住民税及び事業税	829	1,081
法人税等調整額	△82	△40
法人税等合計	746	1,040
少数株主損益調整前当期純利益	965	1,497
少数株主利益又は少数株主損失(△)	△16	6
当期純利益	982	1,490

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	965	1,497
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	304	87
その他の包括利益合計	※1 304	※1 87
包括利益	1,270	1,584
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,287	1,577
少数株主に係る包括利益	△16	6

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,025	4,122	12,864	△11	20,001
当期変動額					
剰余金の配当			△226		△226
当期純利益			982		982
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	755	△0	755
当期末残高	3,025	4,122	13,620	△11	20,757

	その他の包括利益累計額			少数株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価 差額金	退職給付に係る調整 累計額	その他の包括利益累 計額合計		
当期首残高	218	—	218	129	20,350
当期変動額					
剰余金の配当					△226
当期純利益					982
自己株式の取得					△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	304	—	304	△18	286
当期変動額合計	304	—	304	△18	1,042
当期末残高	523	—	523	111	21,392

当連結会計年度(自 平成26年 1 月 1 日 至 平成26年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	3,025	4,122	13,620	△11	20,757
当期変動額					
剰余金の配当			△254		△254
当期純利益			1,490		1,490
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)					
当期変動額合計	—	—	1,235	△0	1,235
当期末残高	3,025	4,122	14,856	△11	21,992

	その他の包括利益累計額			少数株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価 差額金	退職給付に係る調整 累計額	その他の包括利益累 計額合計		
当期首残高	523	—	523	111	21,392
当期変動額					
剰余金の配当					△254
当期純利益					1,490
自己株式の取得					△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	87	△829	△741	△14	△756
当期変動額合計	87	△829	△741	△14	478
当期末残高	611	△829	△218	96	21,870

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,712	2,537
減価償却費	366	345
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△17	15
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	△38	—
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	—	142
前払年金費用の増減額 (△は増加)	△186	—
退職給付に係る資産の増減額 (△は減少)	—	△525
賞与引当金の増減額 (△は減少)	125	573
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	△1	6
業務損失引当金の増減額 (△は減少)	△29	10
長期未払金の増減額 (△は減少)	△43	—
受取利息及び受取配当金	△42	△45
支払利息	3	5
為替差損益 (△は益)	△4	△14
投資有価証券評価損益 (△は益)	34	5
投資有価証券売却損益 (△は益)	—	△22
固定資産処分損益 (△は益)	△154	4
リース解約損	14	1
売上債権の増減額 (△は増加)	△164	601
未成業務支出金の増減額 (△は増加)	△1,106	△649
その他の流動資産の増減額 (△は増加)	41	△66
業務未払金の増減額 (△は減少)	152	△175
未成業務受入金の増減額 (△は減少)	2,250	1,588
その他の流動負債の増減額 (△は減少)	429	302
その他の固定負債の増減額 (△は減少)	△0	0
その他	9	△27
小計	3,349	4,612
利息及び配当金の受取額	41	49
利息の支払額	△3	△5
法人税等の支払額	△375	△1,065
営業活動によるキャッシュ・フロー	3,012	3,591
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△3,000	—
有価証券の売却による収入	3,000	—
有形固定資産の取得による支出	△105	△121
有形固定資産の売却による収入	192	—
無形固定資産の取得による支出	△53	△75
投資有価証券の取得による支出	△98	△86
投資有価証券の売却による収入	—	540
貸付けによる支出	△145	△118
貸付金の回収による収入	172	126
関係会社株式の取得による支出	△11	△18
関係会社出資金の払込による支出	△25	—
定期預金の預入による支出	△3,300	△2,000
定期預金の払戻による収入	2,500	2,300
その他の支出	△121	△41
その他の収入	33	63
投資活動によるキャッシュ・フロー	△962	568

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	450	250
自己株式の取得による支出	△0	△0
リース債務の返済による支出	△132	△103
配当金の支払額	△226	△254
少数株主への配当金の支払額	△1	—
財務活動によるキャッシュ・フロー	89	△108
現金及び現金同等物に係る換算差額	4	14
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	2,143	4,067
現金及び現金同等物の期首残高	6,448	8,592
現金及び現金同等物の期末残高	※1 8,592	※1 12,659

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 3社

連結子会社の名称

株式会社建設技研インターナショナル

福岡都市技術株式会社

株式会社地圏総合コンサルタント

(2) 主要な非連結子会社の数 8社

非連結子会社の名称

武漢長建創維環境科技有限公司

株式会社マネジメントテクノ

株式会社CTIアウラ

株式会社新土木開発

株式会社CTIウイング

株式会社シーティーアイグランドプランニング

株式会社CTIフロンティア

株式会社CTIミャンマー

(株式会社CTIミャンマーは、平成26年3月7日付で設立しました。)

(3) 非連結子会社について連結の範囲から除いた理由

非連結子会社は、いずれも小規模であり、総資産、売上高、当期純損益および利益剰余金等はいずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社及び関連会社の数

持分法を適用している非連結子会社および関連会社はありません。

(2) 持分法を適用していない主要な非連結子会社及び関連会社

武漢長建創維環境科技有限公司、株式会社マネジメントテクノ、株式会社CTIアウラ、株式会社新土木開発、株式会社CTIウイング、株式会社シーティーアイグランドプランニング、株式会社CTIフロンティアおよび株式会社CTIミャンマーは、それぞれ当期純損益および利益剰余金等に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体として重要性がないため、持分法の適用範囲から除外しております。

(株式会社インフラックスは、平成26年7月31日付で解散いたしました。)

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と一致しております。

4 会計処理基準に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

1) 有価証券

満期保有目的の債券

原価法

その他有価証券

・時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

・時価のないもの

移動平均法による原価法

2) たな卸資産

未成業務支出金……個別法による原価法

- (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法
- 1) 有形固定資産（リース資産を除く）……定率法
ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）については、定額法を採用しております。なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。
建物……17～50年
 - 2) 無形固定資産（リース資産を除く）……定額法
なお、自社利用ソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。
 - 3) リース資産
リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。
- (3) 重要な引当金の計上基準
- 1) 貸倒引当金
債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上することとしております。
 - 2) 賞与引当金
従業員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。
 - 3) 役員賞与引当金
役員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。
 - 4) 業務損失引当金
受注業務に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末において見込まれる未成業務の損失額を計上しております。
- (4) 退職給付に係る会計処理の方法
- 1) 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。
 - 2) 数理計算上の差異の費用処理方法
数理計算上の差異は、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により翌連結会計年度から費用処理することとしております。
 - 3) 小規模企業等における簡便法の採用
一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。
- (5) 重要な収益および費用の計上基準
- 売上高の計上は、完成基準によっております。ただし、当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事業務については工事進行基準（工事業務の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。
- (6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
- 連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引出可能な預金および容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。
- (7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項
- 1) 消費税等の会計処理
税抜方式を採用しております。

(会計方針の変更)

「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日。以下「退職給付会計基準」という。)および「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日。以下「退職給付適用指針」という。)を当連結会計年度末より適用し(ただし、退職給付会計基準第35項本文および退職給付適用指針第67項本文に掲げられた定めを除く。)、退職給付債務から年金資産の額を控除した額を退職給付に係る資産および退職給付に係る負債として計上する方法に変更し、未認識数理計算上の差異を退職給付に係る資産および退職給付に係る負債に計上しております。

退職給付会計基準等の適用については、退職給付会計基準第37項に定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度末において、当該変更に伴う影響額をその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に加減しております。

この結果、当連結会計年度末において、退職給付に係る資産が1,050百万円、退職給付に係る負債が1,463百万円計上されるとともに、その他の包括利益累計額が829百万円減少しております。

なお、1株当たり純資産額は58.66円減少しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「退職給付に関する会計基準」(企業会計基準第26号 平成24年5月17日)
- ・「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第25号 平成24年5月17日)

(1) 概要

本会計基準等は、財務報告を改善する観点及び国際的な動向を踏まえ、未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の処理方法、退職給付債務及び勤務費用の計算方法並びに開示の拡充を中心に改正されたものです。

(2) 適用予定日

退職給付債務及び勤務費用の計算方法の改正については、平成27年12月期の期首から適用予定です。

なお、当該会計基準等には経過的な取り扱いが定められているため、過去の期間の連結財務諸表に対しては遡及適用しません。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

当該会計基準を適用することによる連結財務諸表に与える影響については、翌連結会計年度の期首において退職給付に係る資産が129百万円、退職給付に係る負債が651百万円および繰延税金資産が187百万円減少し、利益剰余金が320百万円増加する見込みであります。なお、翌連結会計年度の営業利益、経常利益および税引前当期純利益に与える影響は軽微であります。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書)

前連結会計年度において、「営業外収益」の「その他」に含めておりました「為替差益」は金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた47百万円は「為替差益」6百万円、「その他」41百万円として組替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書)

前連結会計年度において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「短期借入れによる収入」および「短期借入金の返済による支出」は総額表示しておりましたが、期間が短く、かつ、回転が早いため、当連結会計年度より「短期借入金の純増減額(△は減少)」として純額表示することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「短期借入れによる収入」に表示していた2,150百万円および「短期借入金の返済による支出」に表示していた△1,700百万円は、「短期借入金の純増減額(△は減少)」450百万円として組替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社および関連会社に対するものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
投資有価証券(株式)	281百万円	284百万円
投資その他の資産「その他」	50	50

2 保証債務

当社グループ従業員の金融機関からの借入に対し、債務保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
従業員	66百万円	55百万円

(連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目および金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
給与及び手当	3,083百万円	2,988百万円
賞与	544	526
賞与引当金繰入額	158	319
役員賞与引当金繰入額	21	28
退職給付費用	153	146
研究調査費	443	668
貸倒引当金繰入額	—	17

※2 販売費及び一般管理費に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
	443百万円	668百万円

※3 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
有形固定資産 土地	166百万円	—百万円
合計	166	—

※4 固定資産処分損の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
有形固定資産 建物及び構築物	9百万円	2百万円
有形固定資産 その他	2	1
合計	12	4

(連結包括利益計算書関係)

※1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	423百万円	175百万円
組替調整額	△1	△22
税効果調整前	422	153
税効果額	△117	△65
その他有価証券評価差額金	304	87
その他の包括利益合計	304	87

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	14,159,086	—	—	14,159,086

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	17,398	339	—	17,737

(注) 普通株式の自己株式増加339株は、単元未満株式の取得による増加であります。

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成25年3月27日 定時株主総会	普通株式	226	16	平成24年12月31日	平成25年3月28日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成26年3月27日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	254	18	平成25年12月31日	平成26年3月28日

当連結会計年度(自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	14,159,086	—	—	14,159,086

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	17,737	334	—	18,071

(注) 普通株式の自己株式増加334株は、単元未満株式の取得による増加であります。

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成26年3月27日 定時株主総会	普通株式	254	18	平成25年12月31日	平成26年3月28日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成27年3月26日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	254	18	平成26年12月31日	平成27年3月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に記載されている科目の金額の関係

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
現金及び預金勘定	3,390百万円	2,657百万円
有価証券勘定	5,502	10,001
計	8,892	12,659
預入期間3ヶ月超の定期預金	△300	—
合計	8,592	12,659

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引 (借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

1) 有形固定資産

主に事務用機器 (その他) であります。

2) 無形固定資産

ソフトウェア (その他) であります。

(2) リース資産の減価償却方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計処理基準に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については、一時的な余剰資金を安全性の高い金融資産に限定して運用し、デリバティブ等の投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容およびそのリスクならびにリスク管理体制

営業債権である受取手形および完成業務未収入金は、顧客の信用リスクにさらされております。当該リスクに関しては、契約業務管理規程および受託契約取扱要領に従い、所定の期日が過ぎても入金されない場合は、原因を調査し、結果を社内関係者に周知し、関係部署が適切に対処しております。

有価証券および投資有価証券は、主に投資信託や株式であり、市場価格の変動リスクにさらされておりますが、時価のあるものについては定期的に時価の把握を行っております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算出された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれておりません。

前連結会計年度(自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	3,390	3,390	—
(2) 受取手形及び完成業務未収入金	2,301	2,301	—
(3) 有価証券及び投資有価証券			
①満期保有目的の債券	500	501	1
②その他有価証券	6,833	6,833	—
計	13,025	13,026	1

当連結会計年度(自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	2,657	2,657	—
(2) 受取手形及び完成業務未収入金	1,700	1,700	—
(3) 有価証券及び投資有価証券			
その他有価証券	11,554	11,554	—
計	15,912	15,912	—

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資産

(1) 現金及び預金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(2) 受取手形及び完成業務未収入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格または取引金融機関から提示された価格によっております。また、フリー・ファイナンシャル・ファンド等は、短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照ください。

負債

該当事項はありません。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：百万円)

勘定科目	平成25年12月31日	平成26年12月31日
非上場株式	361	364

非上場株式は、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ること等ができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3) 有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権および満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成25年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	3,390	—	—	—
受取手形及び完成業務未収入金	2,301	—	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
社債	—	—	500	—
合計	5,691	—	500	—

当連結会計年度（平成26年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	2,657	—	—	—
受取手形及び完成業務未収入金	1,700	—	—	—
合計	4,358	—	—	—

(有価証券関係)

1 満期保有目的の債券

前連結会計年度(平成25年12月31日)

区分	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	(1) 国債・地方債等	—	—	—
	(2) 社債	500	501	1
	(3) その他	—	—	—
	小計	500	501	1
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	(1) 国債・地方債等	—	—	—
	(2) 社債	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		500	501	1

当連結会計年度(平成26年12月31日)

該当事項はありません。

2 その他有価証券

前連結会計年度(平成25年12月31日)

区分	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,297	605	692
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,297	605	692
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	(1) 株式	33	35	△2
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	5,502	5,502	—
	小計	5,535	5,537	△2
合計		6,833	6,142	690

当連結会計年度(平成26年12月31日)

区分	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,552	709	843
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,552	709	843
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	10,001	10,001	—
	小計	10,001	10,001	—
合計		11,554	10,711	843

3 連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

前連結会計年度（平成25年12月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

	売却原価 (百万円)	売却額 (百万円)	売却損益 (百万円)
社債	500	500	—

売却の理由

発行元の権利行使によるものであります。

4 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）

	売却額 (百万円)	売却益の合計 (百万円)	売却損の合計 (百万円)
株式	4	1	—

当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

	売却額 (百万円)	売却益の合計 (百万円)	売却損の合計 (百万円)
株式	40	22	—

5 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）

当連結会計年度において、投資有価証券について34百万円の減損処理を行っております。

当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

当連結会計年度において、投資有価証券について5百万円の減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

当社グループはデリバティブ取引を全く利用していないため、該当事項はありません。

(退職給付関係)

前連結会計年度(自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)

1 採用している退職給付制度の概要

当社および連結子会社は、確定給付型の制度として厚生年金基金制度、規約型企業年金制度および退職一時金制度を設けております。

厚生年金基金制度については、当社および株式会社建設技研インターナショナルは建設コンサルタンツ厚生年金基金(総合設立)に昭和46年から加入しており、福岡都市技術株式会社は全国測量業厚生年金基金(総合設立)に昭和47年から加入しております。

また、従業員の退職等に際して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない退職金を支払う場合があります。

なお、当社は退職給付信託を設定しております。

2 退職給付債務およびその内訳

(1) 退職給付債務	△10,140 百万円
(2) 年金資産	9,168
(3) 退職給付信託	1,309
<hr/>	
(4) 未積立退職給付債務(1)+(2)+(3)	336
(5) 未認識数理計算上の差異	191
<hr/>	
(6) 連結貸借対照表計上額純額(4)+(5)	528
(7) 前払年金費用	1,129
<hr/>	
(8) 退職給付引当金(6)-(7)	△601

(注) 退職給付債務の算定にあたり、当社および連結子会社1社が原則法を採用しており、他の連結子会社2社は簡便法を採用しております。

3 退職給付費用の内訳

(1) 勤務費用	580 百万円
(2) 利息費用	173
(3) 期待運用収益	△180
(4) 数理計算上の差異の費用処理額	232
(5) 臨時に支払った退職金等	0
<hr/>	
(6) 退職給付費用(1)+(2)+(3)+(4)+(5)	806

(注) 簡便法を採用している連結子会社について、その退職給付費用はすべて「(1) 勤務費用」に計上しております。

4 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

原則法を採用している当社および連結子会社の退職給付債務等の計算の基礎に関する事項については、以下のとおりです。

(1) 割引率	2.0%
(2) 期待運用収益率	2.0%
(3) 退職給付見込額の期間配分方法	期間定額基準
(4) 数理計算上の差異の処理年数	翌連結会計年度から5年

5 厚生年金基金に関する事項

(1) 制度全体の積立状況に関する事項（平成25年3月31日現在）

①建設コンサルタント厚生年金基金

年金資産額	162,116 百万円
年金財政計算上の給付債務の額	188,179
差引額	△26,063

②全国測量業厚生年金基金

年金資産額	159,598 百万円
年金財政計算上の給付債務の額	172,428
差引額	△12,830

(2) 制度全体に占める当社グループの給与総額割合（平成25年3月31日現在）

①建設コンサルタント厚生年金基金	6.95%
②全国測量業厚生年金基金	0.43%

(3) 補足説明

①建設コンサルタント厚生年金基金

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高23,463百万円および剰余金、不足金等2,600百万円であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は、期間15年の元利均等償却であります。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

②全国測量業厚生年金基金

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高8,410百万円および剰余金、不足金等4,419百万円であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は、期間20年の元利均等償却であります。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

1 採用している退職給付制度の概要

当社および連結子会社は、確定給付型の制度として厚生年金基金制度、規約型企業年金制度および退職一時金制度を設けております。

当社および株式会社建設技研インターナショナルは建設コンサルタンツ厚生年金基金（総合設立）に昭和46年から加入しており、福岡都市技術株式会社は全国測量業厚生年金基金（総合設立）に昭和47年から加入しております。

加入している厚生年金制度については、いずれも複数事業主制度であり、自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができないため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債および退職給付費用を計算しております。

当社および株式会社建設技研インターナショナルは、厚生年金基金の代行部分について、平成26年11月1日に厚生労働大臣から将来分支給義務免除の認可を受けております。

従業員の退職等に際して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない退職金を支払う場合があります。

当社は退職給付信託を設定しております。

2 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く。）

（1）退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

退職給付債務の期首残高	9,713百万円
勤務費用	637
利息費用	194
数理計算上の差異の発生額	1,638
退職給付の支払額	△585
退職給付債務の期末残高	11,599

（2）年金資産の期首残高と期末残高の調整表

年金資産の期首残高	10,266百万円
期待運用収益	205
数理計算上の差異の発生額	493
事業主からの拠出額	911
退職給付の支払額	△518
年金資産の期末残高	11,359

（3）退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

積立型制度の退職給付債務	10,343百万円
年金資産	△11,359
	△1,016
非積立型制度の退職給付債務	1,255
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	239
退職給付に係る負債	1,279
退職給付に係る資産	△1,040
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	239

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

勤務費用	637百万円
利息費用	194
期待運用収益	△205
数理計算上の差異の費用処理額	11
確定給付制度に係る退職給付費用	638

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果調整前）の内訳は次のとおりであります。

未認識数理計算上の差異	△1,325百万円
合計	△1,325

(6) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

国内債券	23%
国内株式	10
外国債券	4
外国株式	8
生保一般勘定	52
その他	3
合計	100

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が12%含まれております。

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(7) 数理計算上の計算基礎に関する事項

当連結会計年度末における主要な数理計算上の計算基礎

割引率	主として0.7%
長期期待運用収益率	2.0%

3 簡便法を使用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

退職給付に係る負債の期首残高	216百万円
退職給付費用	41
退職給付の支払額	△6
制度への拠出額	△77
退職給付に係る負債と資産の純額	173
退職給付に係る負債	183
退職給付に係る資産	△10
退職給付に係る負債と資産の純額	173

- (2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

積立型制度の退職給付債務	445百万円
年金資産	△276
	169
非積立型制度の退職給付債務	4
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	173
退職給付に係る負債	183
退職給付に係る資産	△10
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	173

- (3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用	41百万円
----------------	-------

4 複数事業主制度

- (1) 複数事業主制度の直近の積み立て状況（平成26年3月31日現在）

①建設コンサルタンツ厚生年金基金

年金資産の額	179,785百万円
年金財政計算上の給付債務の額	199,165
差引額	△19,379

②全国測量業厚生年金基金

年金資産の額	176,652百万円
年金財政計算上の給付債務の額	182,503
差引額	△5,851

- (2) 複数事業主制度における当社グループの給与総額割合（平成26年3月31日現在）

①建設コンサルタンツ厚生年金基金	7.05%
②全国測量業厚生年金基金	0.43%

- (3) 補足説明

確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の厚生年金基金制度への要拠出額は、478百万円でありました。

①建設コンサルタンツ厚生年金基金

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高22,128百万円および剰余金、不足金等△2,748百万円であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は、期間15年の元利均等償却であり、当期の連結財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金152百万円を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

②全国測量業厚生年金基金

上記(1)の差引額の主な要因は、年金財政計算上の過去勤務債務残高8,208百万円および剰余金、不足金等△2,357百万円であります。

本制度における過去勤務債務の償却方法は、期間20年の元利均等償却であり、当期の連結財務諸表上、当該償却に充てられる特別掛金3百万円を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生 の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
繰延税金資産(流動資産)		
未払事業税	60百万円	62百万円
業務損失引当金	37	38
賞与引当金	203	396
賞与社会保険料	27	58
繰越欠損金	39	—
その他	54	70
小計	421	626
評価性引当金	△4	△10
合計	417	616
繰延税金負債(流動負債)		
未収事業税	3百万円	—百万円
合計	3	—
繰延税金資産(流動資産)の純額	413百万円	616百万円
繰延税金資産(固定資産)		
退職給付引当金	230百万円	—百万円
退職給付に係る負債	—	577
長期未払金	38	37
有価証券評価損	83	74
資産除去債務	43	45
繰越欠損金	38	—
その他	21	23
小計	455	758
評価性引当金	△95	△87
繰延税金資産合計	360	670
繰延税金負債(固定負債)		
有形固定資産	32百万円	32百万円
その他有価証券評価差額金	167	232
合計	199	264
繰延税金資産 (固定資産)の純額	160百万円	405百万円

(注) 前連結会計年度および当連結会計年度における繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
流動資産—繰延税金資産	413百万円	616百万円
固定資産—繰延税金資産	160	408
固定負債—繰延税金負債	—	2

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成25年12月31日)	当連結会計年度 (平成26年12月31日)
法定実効税率	38.01%	38.01%
(調整)		
交際費等の損金不算入	0.74	0.48
住民税均等割	5.23	3.63
受取配当等の益金不算入	△0.37	△0.30
税率変更による 期末繰延税金資産の減額修正	—	1.73
所得拡大促進税制による税額控除	—	△2.54
役員賞与損金不算入	0.52	0.33
評価性引当金	0.02	△0.10
その他	△0.53	△0.24
税効果会計適用後の 法人税等の負担率	43.62	41.00

3 法人税等の税率の変更による繰延税金資産の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成26年法律第10号)が平成26年3月31日に公布され、平成26年4月1日以後に開始する連結会計年度から復興特別法人税が課されないこととなりました。これにともない、当連結会計年度の繰延税金資産および繰延税金負債の計算に使用した法定実効税率は、平成27年1月1日に開始する連結会計年度に解消が見込まれる一時差異について、前連結会計年度の38.01%から35.64%に変更されております。

その結果、繰延税金資産の金額(繰延税金負債の金額を控除した金額)が43百万円減少し、当連結会計年度に計上された法人税等調整額が43百万円増加しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）および当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

当社グループの事業は、建設コンサルタントならびにこれらの付帯業務の単一事業であり、当該事業以外に事業の種類がないため、該当事項はありません。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

当社グループは、建設コンサルタントならびにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
国	16,983	建設コンサルタント

当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

1 製品及びサービスごとの情報

当社グループは、建設コンサルタントならびにこれらの付帯業務の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
国	20,582	建設コンサルタント

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）および当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）および当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）および当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

該当事項はありません。

（企業結合等関係）

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）および当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

該当事項はありません。

（賃貸等不動産関係）

前連結会計年度（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）および当連結会計年度（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）

賃貸等不動産について記載すべき重要なものはないため開示を省略しています。

（1株当たり情報）

	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
1株当たり純資産額	1,504.86円	1,539.79円
1株当たり当期純利益	69.46円	105.38円

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益につきましては、潜在株式がないため該当事項はありません。

2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当連結会計年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
連結損益計算書上の当期純利益(百万円)	982	1,490
普通株式に係る当期純利益(百万円)	982	1,490
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式の期中平均株式数(株)	14,141,540	14,141,148

（重要な後発事象）

該当事項はありません。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	600	850	0.7	—
1年以内に返済予定の長期借入金	—	—	—	—
1年以内に返済予定のリース債務	92	81	—	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	—	—	—	—
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	132	125	—	平成28年～平成32年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	824	1,056	—	—

- (注) 1 平均利率については、借入金等の当期末残高に対する加重平均利率を記載しております。
 2 リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。
 3 リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年以内における返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
リース債務	64	35	18	5

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首および当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首および当連結会計年度末における負債および純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しています。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	10,006	20,878	30,158	39,524
税金等調整前四半期(当期)純利益金額(百万円)	1,050	1,970	2,371	2,537
四半期(当期)純利益金額(百万円)	587	1,113	1,341	1,490
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	41.56	78.73	94.84	105.38

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	41.56	37.17	16.11	10.54

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,480	1,782
完成業務未収入金	1,348	780
有価証券	5,502	10,001
未成業務支出金	10,185	10,569
前払費用	107	122
繰延税金資産	313	489
短期貸付金	※1 441	※1 283
その他	74	99
貸倒引当金	△13	△11
流動資産合計	20,439	24,117
固定資産		
有形固定資産		
建物	3,705	3,740
減価償却累計額	△2,113	△2,183
建物（純額）	1,591	1,556
構築物	714	716
減価償却累計額	△544	△554
構築物（純額）	170	162
機械及び装置	236	236
減価償却累計額	△223	△226
機械及び装置（純額）	12	10
工具、器具及び備品	902	954
減価償却累計額	△764	△806
工具、器具及び備品（純額）	137	147
土地	4,556	4,556
リース資産	313	270
減価償却累計額	△167	△148
リース資産（純額）	146	122
有形固定資産合計	6,615	6,556
無形固定資産		
借地権	16	16
ソフトウェア	127	146
電話加入権	22	22
専用施設利用権	0	0
リース資産	2	5
その他	0	0
無形固定資産合計	169	191

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	1,909	1,631
関係会社株式	551	554
関係会社出資金	50	50
出資金	3	3
長期預金	800	800
長期前払費用	38	29
繰延税金資産	104	—
敷金及び保証金	736	711
会員権	51	51
前払年金費用	1,083	1,584
その他	0	0
貸倒引当金	△0	△0
投資その他の資産合計	5,329	5,416
固定資産合計	12,114	12,164
資産合計	32,553	36,282
負債の部		
流動負債		
業務未払金	※1 1,406	※1 1,314
リース債務	67	55
未払金	192	310
未払法人税等	687	648
未払消費税等	212	224
未払費用	696	786
未成業務受入金	6,748	8,471
預り金	421	476
前受収益	4	4
賞与引当金	500	941
役員賞与引当金	21	28
業務損失引当金	42	35
その他	—	3
流動負債合計	11,001	13,302
固定負債		
長期未払金	89	89
リース債務	85	76
繰延税金負債	—	78
退職給付引当金	381	545
資産除去債務	91	93
その他	63	57
固定負債合計	711	940
負債合計	11,712	14,242

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,025	3,025
資本剰余金		
資本準備金	4,122	4,122
資本剰余金合計	4,122	4,122
利益剰余金		
利益準備金	176	176
その他利益剰余金		
別途積立金	8,700	8,700
繰越利益剰余金	4,303	5,415
利益剰余金合計	13,180	14,292
自己株式	△11	△11
株主資本合計	20,317	21,429
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	523	611
評価・換算差額等合計	523	611
純資産合計	20,840	22,040
負債純資産合計	32,553	36,282

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当事業年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
売上高	30,059	33,211
売上原価	21,934	23,941
売上総利益	8,125	9,270
販売費及び一般管理費	※2 6,639	※2 7,116
営業利益	1,485	2,153
営業外収益		
受取利息	※1 7	※1 6
受取配当金	※1 26	※1 33
有価証券利息	17	9
受取家賃	※1 35	※1 35
受取保険配当金	21	6
その他	47	35
営業外収益合計	155	127
営業外費用		
支払手数料	6	5
設立50周年記念事業費	15	—
その他	1	0
営業外費用合計	22	5
経常利益	1,619	2,275
特別利益		
固定資産売却益	※3 166	※3 —
投資有価証券売却益	—	22
特別利益合計	166	22
特別損失		
固定資産処分損	※4 11	※4 3
投資有価証券評価損	34	5
リース解約損	13	1
地中障害物撤去負担額	31	—
その他	0	—
特別損失合計	92	10
税引前当期純利益	1,693	2,288
法人税、住民税及び事業税	782	980
法人税等調整額	△58	△58
法人税等合計	723	921
当期純利益	969	1,366

【完成業務原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)			当事業年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)		
		金額(百万円)		構成比 (%)	金額(百万円)		構成比 (%)
I 労務費							
1 給料及び手当		7,052			7,625		
2 賞与		1,218			1,314		
3 賞与引当金繰入額		336			644		
4 退職給付費用		587			451		
5 その他		1,545	10,741	47.0	1,685	11,721	48.2
II 外注費			8,635	37.7		8,839	36.3
III 経費							
1 旅費交通費		979			1,027		
2 印刷青函費		397			411		
3 消耗品費		283			321		
4 賃借料		867			899		
5 減価償却費		151			144		
6 業務損失引当金繰入額		△5			△7		
7 その他		823	3,497	15.3	967	3,765	15.5
当期総業務費用			22,875	100.0		24,326	100.0
期首未成業務支出金			9,244			10,185	
合計			32,119			34,511	
期末未成業務支出金			10,185			10,569	
当期完成業務原価			21,934			23,941	

(脚注) 原価計算の方法は、個別原価計算によっております。

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成25年 1月 1日 至 平成25年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金合計
		資本準備金	資本剰余金合計		別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	3,025	4,122	4,122	176	8,700	3,559	12,436
当期変動額							
剰余金の配当						△226	△226
当期純利益						969	969
自己株式の取得							
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)							
当期変動額合計	—	—	—	—	—	743	743
当期末残高	3,025	4,122	4,122	176	8,700	4,303	13,180

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△11	19,573	218	218	19,792
当期変動額					
剰余金の配当		△226			△226
当期純利益		969			969
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			304	304	304
当期変動額合計	△0	743	304	304	1,048
当期末残高	△11	20,317	523	523	20,840

当事業年度(自 平成26年 1月 1日 至 平成26年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金合計
		資本準備金	資本剰余金合計		その他利益剰余金		
				別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	3,025	4,122	4,122	176	8,700	4,303	13,180
当期変動額							
剰余金の配当						△254	△254
当期純利益						1,366	1,366
自己株式の取得							
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)							
当期変動額合計	—	—	—	—	—	1,112	1,112
当期末残高	3,025	4,122	4,122	176	8,700	5,415	14,292

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	△11	20,317	523	523	20,840
当期変動額					
剰余金の配当		△254			△254
当期純利益		1,366			1,366
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			87	87	87
当期変動額合計	△0	1,111	87	87	1,199
当期末残高	△11	21,429	611	611	22,040

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券

原価法

(2) 子会社株式および関連会社株式

移動平均法による原価法

(3) その他有価証券

・時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

・時価のないもの

移動平均法による原価法

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

未成業務支出金……個別法による原価法

3 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）……定率法

ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）については、定額法を採用しております。なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物……17～50年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）……定額法

なお、自社利用ソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上することとしております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき計上しております。

(4) 業務損失引当金

受注業務に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末において見込まれる未成業務の損失額を計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき計上しております。

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(5年)による定額法により翌事業年度から費用処理することとしております。

5 収益および費用の計上基準

売上高の計上は、完成基準によっております。ただし、当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事業務については工事進行基準（工事業務の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 消費税等の会計処理

税抜方式を採用しております。

(2) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(表示方法の変更)

貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、有形固定資産等明細表、引当金明細表については、財務諸表等規則第127条第1項に定める様式に基づいて作成しております。

また、財務諸表等規則第127条第2項に掲げる各号の注記については、各号の会社計算規則に掲げる事項の注記に変更しております。

以下の事項について、記載を省略しております。

- ・財務諸表等規則第86条に定める研究開発費の注記については、同条第2項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第107条に定める自己株式に関する注記については、同条第2項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第8条の6に定めるリース取引に関する注記については、同条第4項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第8条の28に定める資産除去債務に関する注記については、同条第2項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第68条の4に定める1株当たり純資産額の注記については、同条第3項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第95条の5の2に定める1株当たりの当期純損益金額に関する注記については、同条第3項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第95条の5の3に定める潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額に関する注記については、同条第4項により、記載を省略しております。
- ・財務諸表等規則第121条第1項第1号に定める有価証券明細表については、同条第3項により、記載を省略しております。

(損益計算書)

前事業年度において、「営業外収益」の「貸倒引当金戻入額」は区分掲記しておりましたが、金額的重要性が乏しくなったため、当事業年度より「その他」に含めて表示することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「貸倒引当金戻入額」に表示していた17百万円は「その他」として組替えております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する資産及び負債

区分表示されたもの以外で当該関係会社に対する金銭債権または金銭債務の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
短期金銭債権	554百万円	301百万円
短期金銭債務	207	147
長期金銭債務	45	46

2 保証債務

下記の従業員の金融機関からの借入に対し、債務保証を行っております。

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
当社従業員	65百万円	52百万円
株式会社建設技研 インターナショナルの従業員	1	2

(損益計算書関係)

※1 関係会社との営業取引および営業取引以外の取引の取引高の総額

	前事業年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当事業年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
営業取引による取引高		
売上高	138百万円	34百万円
外注費	1,217	1,249
その他営業取引高	93	111
営業取引以外の取引高	50	47

※2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度37%、当事業年度34%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度63%、当事業年度66%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目および金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当事業年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
給料及び手当	2,676百万円	2,639百万円
賞与引当金繰入額	149	289
役員賞与引当金繰入額	21	28
退職給付費用	143	131
貸倒引当金繰入額	—	0
減価償却費	94	77

※3 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当事業年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
土地	166百万円	一百万円
合計	166	—

※4 固定資産処分損の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日)	当事業年度 (自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日)
建物	8百万円	1百万円
工具、器具及び部品	2	1
合計	11	3

(有価証券関係)

子会社株式および関連会社株式は、市場価格がなく時価を把握することが極めて困難と認められるため、子会社株式および関連会社株式の時価を記載しておりません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式および関連会社株式の貸借対照表計上額は以下のとおりです。

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
子会社株式	536百万円	554百万円
関連会社株式	15	—
合計	551	554

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
繰延税金資産(流動資産)		
未払事業税	58百万円	55百万円
業務損失引当金	16	12
賞与引当金	190	335
賞与社会保険料	25	47
その他	27	42
小計	317	494
評価性引当金	△4	△4
合計	313	489
繰延税金資産(固定資産)		
退職給付引当金	220百万円	96百万円
長期未払金	32	31
有価証券評価損	83	74
資産除去債務	32	33
その他	16	22
小計	385	258
評価性引当金	△89	△80
合計	296	177
繰延税金負債(固定負債)		
有形固定資産	24百万円	23百万円
その他有価証券評価差額金	167	232
合計	191	255
繰延税金資産 (固定資産)の純額	104百万円	—百万円
繰延税金負債 (固定負債)の純額	—	78

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成25年12月31日)	当事業年度 (平成26年12月31日)
法定実効税率	38.01%	38.01%
(調整)		
交際費等の損金不算入	0.60	0.46
住民税均等割	4.70	3.60
受取配当等の益金不算入	△0.37	△0.33
税率変更による 期末繰延税金資産の減額修正	—	1.57
所得拡大促進税制による 税額控除	—	△2.64
役員賞与損金不算入	0.41	0.36
評価性引当金	0.02	△0.44
その他	△0.64	△0.33
税効果会計適用後の 法人税等の負担率	42.73	40.26

3 法人税等の税率の変更による繰延税金資産の金額の修正

「所得税法等の一部を改正する法律」(平成26年法律第10号)が平成26年3月31日に公布され、平成26年4月1日以後に開始する事業年度から復興特別法人税が課されないこととなりました。これにともない、当事業年度の繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用した法定実効税率は、平成27年1月1日に開始する事業年度に解消が見込まれる一時差異について、前事業年度の38.01%から35.64%に変更されております。

その結果、繰延税金資産の金額(繰延税金負債の金額を控除した金額)が35百万円減少し、当事業年度に計上された法人税等調整額が35百万円増加しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価償 却累計額 (百万円)
有形固定資産						
建物	1,591	47	1	80	1,556	2,183
構築物	170	1	—	10	162	554
機械及び装置	12	—	—	2	10	226
工具、器具及び備品	137	66	1	55	147	806
土地	4,556	—	—	—	4,556	—
リース資産	146	51	1	73	122	148
有形固定資産計	6,615	167	4	221	6,556	3,918
無形固定資産						
借地権	16	—	—	—	16	—
ソフトウェア	127	78	1	58	146	—
電話加入権	22	—	—	—	22	—
専用施設利用権	0	—	—	0	0	—
リース資産	2	4	—	1	5	—
その他	0	0	—	0	0	—
無形固定資産計	169	83	1	59	191	—

【引当金明細表】

科目	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	13	0	1	12
賞与引当金	500	941	500	941
役員賞与引当金	21	28	21	28
業務損失引当金	42	35	42	35
退職給付引当金	381	229	66	545

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日
定時株主総会	3月中
基準日	12月31日
剰余金の配当の基準日	6月30日、12月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	無料
公告掲載方法	当会社の公告は、電子公告により行う。ただし、やむを得ない事由により電子公告によることができないときは、日本経済新聞に掲載する方法により行う。 なお、電子公告は当社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。 http://www.ctie.co.jp/
株主に対する特典	なし

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書およびその添付書類ならびに確認書

事業年度（第51期）（自 平成25年1月1日 至 平成25年12月31日）平成26年3月28日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書

平成26年3月28日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書および確認書

（第52期第1四半期）（自 平成26年1月1日 至 平成26年3月31日）平成26年5月14日関東財務局長に提出

（第52期第2四半期）（自 平成26年4月1日 至 平成26年6月30日）平成26年8月13日関東財務局長に提出

（第52期第3四半期）（自 平成26年7月1日 至 平成26年9月30日）平成26年11月13日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2の規定に基づく臨時報告書

平成26年3月28日関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成27年3月27日

株式会社建設技術研究所
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 北 方 宏 樹 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 滝 沢 勝 己 ㊞

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社建設技術研究所の平成26年1月1日から平成26年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社建設技術研究所及び連結子会社の平成26年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社建設技術研究所の平成26年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社建設技術研究所が平成26年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成27年3月27日

株式会社建設技術研究所
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 北 方 宏 樹 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 滝 沢 勝 己 ㊞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社建設技術研究所の平成26年1月1日から平成26年12月31日までの第52期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社建設技術研究所の平成26年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- ※ 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成27年3月27日
【会社名】	株式会社建設技術研究所
【英訳名】	CTI Engineering Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 村田 和夫
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都中央区日本橋浜町三丁目21番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社建設技術研究所 大阪本社 (大阪市中央区道修町一丁目6番7号) 株式会社建設技術研究所 中部支社 (名古屋市中区錦一丁目5番13号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長 村田和夫は、当社および連結子会社（以下「当社グループ」という）の財務報告に係る内部統制の整備および運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準 並びに 財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備および運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止または発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当連結会計年度の末日である平成26年12月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、わが国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備および運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社グループについて、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的および質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社および連結子会社3社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲は、各事業拠点の当連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、当連結会計年度の連結売上高の概ね3分の2に達している当社を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、完成業務未収入金、未成業務受入金および未成業務支出金に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測をとともう重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業または業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価手続を実施した結果、当連結会計年度の末日時点において、当社グループの財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成27年3月27日
【会社名】	株式会社 建設技術研究所
【英訳名】	CTI Engineering Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 村田 和夫
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都中央区日本橋浜町三丁目21番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社 建設技術研究所 大阪本社 (大阪市中央区道修町一丁目6番7号) 株式会社建設技術研究所 中部支社 (名古屋市中区錦一丁目5番13号) 株式会社 東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長村田和夫は、当社の第52期（自 平成26年1月1日 至 平成26年12月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。